

インドの言語環境と ELF 使用場面から見る英語コミュニケーション能力 —インド人と日本人のビジネス・パーソンへの座談会から—

重光 由加 *1

Possible Difference in ELF discourse styles between Indian and Japanese business persons ---From the group discussion conducted in India---

Yuka Shigemitsu *1

Abstract: This paper considers ELF (English as a lingua franca) in intercultural settings, and universal communication skills. The group discussions were conducted in Bangalore, India in 2017 with Indian business persons and Japanese business persons. They discuss conversation break down from their experiences. Indian people claim that short messages from Japanese business persons are difficult to understand. They try to understand by asking questions to Japanese business persons. On the other hand, Japanese business persons feels different attitude in the talk. Such discourse style discourse different causes trouble for controlling meetings and communication. The topic they talked supports the concept of the communication skills are. It is clarified cultural values, turn-taking system and topic development are important in communication in intercultural settings. This paper will be the base for future discourse analysis in intercultural settings.

1. はじめに

本研究では、英語のコミュニケーション能力について、インド人と日本人のビジネス・パーソンの ELF (English as a lingua franca) 使用場面に関する聞き取り調査から考察し、何が問題となっているかを明らかにすることを目的とする。まず、ELF の先行研究を概観し、ELF が使用される接触場面における異文化間コミュニケーションで起こり得る問題点について述べる。次に、コミュニケーション能力についての知見を整理し、ELF 研究との関連について考える。調査方法として、インドある日系企業に勤務するインド人と日本人のビジネス・パーソンそれぞれの座談会を開き、両者が接触場面のコミュニケーションにおいてどのような点に配慮しているのか、どのような点に苦勞をしているのかを、それにどのように対応しているかを抽出する。ビジネス・パーソン同士の会話に注目した理由は、日本人がもっとも接触する可能性があるインド人がグローバル企業に勤めるビジネス・パーソンだからである。最後に英語コミュニケーション能力の獲得のために何が必要かを検討する。なお、本研究は科研費基盤研究(C)課題番号 17K02903「南アジア・東南アジアにおける ELF 談話スタイルの実態調査：英語発信力に向けて」の一部であり、以後の談話スタイル分析の方向付けとなるものである。インドに着目した理由は、日系企業のインドへの参入が

急激に増えて、インドへ派遣される日本人ビジネス・パーソンの人数も増えているからである。共同通信社による『世界年鑑 2015』と東京書籍編集部の『世界各国要覧』（年号）によると、インドにある日系企業は 2004 年には 263 社、2008 年は 550 社、2014 年には 1072 社と 10 年間でほぼ 4 倍に増えており、インド人との ELF 使用場面が着目されるところである。

一方、日本の英語教育では Inner Circle の英語を指導しているが、日本人ビジネス・パーソンがインドで耳にする英語は、日本の英語の授業で聞く英語とは異なる。Inner Circle の英語の談話スタイルに関しては、日本の英語教材の中で紹介されることが多く、書籍、映画やドラマ、ニュースなどから触れることもでき、談話スタイルに意識が向く学習者ならば、帰納的に習得することもできるだろう。談話スタイルに対しては予想ができる。しかし、インド人の話す英語や文化に関しては情報を得る機会が少なく、独特の発音、古風な英語表現の使用などを紹介するものが多い。また、情報の少なさから、特殊な文化・社会的環境という偏った見方もある。日本で英語教育に携わる人にもインドで使用されている英語についての理解が少なく、誤解も多い。そのような、誤解を解く一助になる研究とすることも本研究の目的である。

*1 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授
2018年9月25日 受理

2. 理論的背景

2.1 ELF について

日本人とインド人ビジネス・パーソン同士の接触会話は、ELF の場面である。ELF とは、どの話者の母語も英語ではない異言語接触の際に用いられる英語と定義されている(Mauranen, p. 29)。大英帝国時代に経済や外交の中心であったイギリスと、その後のアメリカ合衆国の勢力拡大により、英語は世界史上で前例がない程、使用範囲の広がりを見せている。グローバリゼーションのためには共通の言語がある方が便利であり、現在は、英語がその役目を担っている。また、英語が広く使われるようになることで、グローバリゼーションが促進されているとも言え、このように、英語の広がりとはグローバリゼーションは相互に作用しあっていると言える。

英語は Inner Circle の母語ではあるが、ELF で用いられる英語の変種はどの地域にも属さないものと定義されている (Sidehofer, 2015)。ELF 使用者が増大し、Inner Circle の英語母語話者が少数派となっている現実もある。しかし、学術的にはどのような英語が話されているのか、ELF 使用者が使う英語の共通部分と個別部分(母語の影響)の実態は研究がほとんどなされておらず、ELF 環境の分析は重要な課題である。ELF を使用したインタラクションの特徴への喚起のために何をしたらよいか、ELF による communicative ability の育成のための改善点は何か、教育のポリシーの再考、カリキュラム・デザイン、シラバス・デザインへの考慮はどの程度必要かなど課題は山積している (Murata, 2015)。

2.2 異文化間コミュニケーションの問題点

ELF が話される接触場面は、異文化間コミュニケーションの場である。そこでは、個別言語の規範、文法、表現など明示化された部分ではなく、それぞれの話者の文化・社会的背景により無意識に用いられている談話スタイルの側面が会話の成功に大きくかかわってくる。文法、表現の間違いにより意味がとれないことは、確認が可能である。しかし、文化・社会的側面から見ると、人間は自分が感じたりやっていたりするように他の人もやっているはずと思いつく性質があり(Tannen, 1982)、発言内容や話し方が自分と異なると、違和感や不快感を覚えやすい。

FitzGerald (2003) は世界各地からオーストラリアに移民として来た非英語母語話者に対する英語指導の経験から、異文化コミュニケーションの弊害になる点に関して、異文化間コミュニケーションでは聞き取り能力、発音、文法のまちがいよりも、「発話に表出される価値観」「ターン・テーキング・スタイル」「談話の組み立て」の異なりが大きく影響すると主張している。この3つの項目は、母語では無意識に行われている部分である。母語で無意識に行われているということは、母語で生活しながら社会・文化的規範について、その規範が明文化されないまま身につけているということである。「価値観」は発言内容、考え方であ

り、会話参加者同士の間で意見の不一致があると、あたりまえのことを言っているのになぜ理解できないのかという苛立ちにつながる。「ターン・テーキング・スタイル」は、話すスピード、発言中の割り込みや同時発話の許容、会話の中の沈黙の許容、発言の順番などである。たとえば、日本では失礼にあたるが、ラテン系の文化では、人が話している最中に重ねてしゃべることが普通の会話の振る舞いである例もある。「談話の組み立て」の方法は、どの順番で話すのか、重要なポイントをどの部分で話すか、たとえば、演繹的に話すのか帰納的に話すのかにかかわることである。演繹的な談話の組み立ての場合は、帰納的談話組み立て話者から重要ポイントが聞き逃される場合がある。一方、帰納的談話話者は結論を述べる前に、演繹的談話話者から遮られたり、話題を変えられたりする可能性がある。

さらに、このような文化的背景を基盤とする「価値観」「談話の組み立て」「ターン・テーキング・スタイル」の異なりは、無意識に身に着いたものであるため、会話参加者同士に不愉快な気持ちを与えるだけでなく、異なりを相手の性格に由来すると誤って受け取られることが多い。このことは、相手に対する信頼度に影響するため、人間関係に大きな問題を生じさせることが、FitzGerald(2003)の実験会話データから明らかになった。

2.3 コミュニケーション能力について

談話スタイルに着目した場合、外国語教育の能力に求められるスキルは言語知識だけにはとどまらない。大谷(2015)によると、コミュニケーション能力のモデルとして広く受け入れられているものに Canale & Swine(1980)がある。このモデルは Grammatical competence (語彙・統語・音声などを認識する能力)、sociolinguistic competence (その言語が使用される社会的文脈を理解する能力)、discourse competence (文や発話をまとまりとして理解する能力)、strategic competence (不十分な知識の中でも会話を継続させるためにパラフレーズ、繰り返し、回避等の方略を使用する能力)の四つに下位分類されている(大谷 2015: 5)。Celce-Murcia(2008)は、この分類を図1のようにより詳細にしたモデルを示した。このモデルでは 'communicative competence' の下位要素には、'linguistic competence,' 'formulaic competence,' 'sociocultural competence,' 'interactional competence,' 'discourse competence,' 'strategic competence' の6つが示されている(Celce-Murcia 2007: 45)。大谷(2015)は、Celce-Murcia (2007)で注目すべき点は、'sociocultural competence' と 'interactional competence' が重要な能力として位置づけられていることであると指摘している(pp. 5-6)。たとえば、'sociocultural competence' は、コミュニケーション能力を統制する役割を果たし、特に重要な能力と言える。この能力は、文化的コンテキストの中でのメッセージの伝え方、社会的規範の知識にも及ぶものである。また 'interactional competence' は Canale & Swine(1980)のモデルにはなく Celce-Murcia(2007)が新たに追加した。

この能力には、発話行為だけでなく、意見や感情の伝え方、情報交換の仕方などの「方法」にあたる部分を理解できる能力となっている。

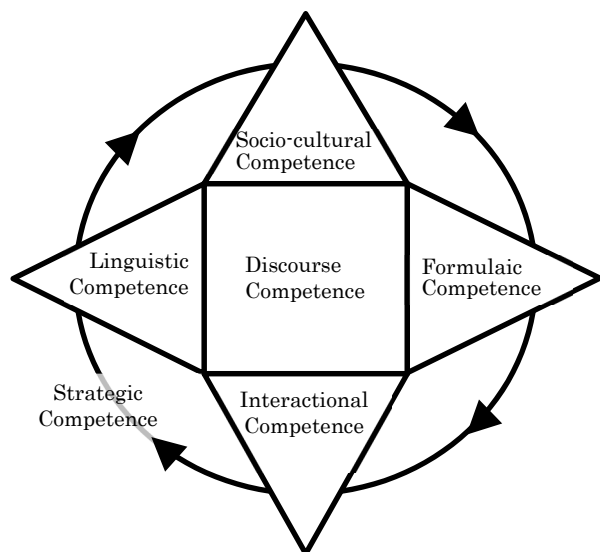


図1 Revised schematic representation of 'communicative competence' (Celce-Murcia 2007:45)

コミュニケーション能力の習得や教育に関しては、2001年に発表された CEFR(Common European Framework of Languages Reference)も影響力のある論である。これは、欧州評議会が言語コミュニケーション能力の育成を重視し、言語能力向上計画の中で、欧州共通の言語能力を規定する枠組みとして提案したものである。異なる言語の学習者、および、異なる国や地域に住む学習者の能力を同一の指標で参照できる指標として 2001 年の出版物で完成された(投野, 2013)。2001 年度版では、'understanding' 'speaking' 'writing' の 3 つの大きな枠組みがあり、'understanding' の下位分類には 'reading' と 'listening' がある。そして、本研究にかかわる 'speaking' の下位分類には 'spoken interaction' と 'spoken production' の 2 つから成り立つ。このことが示しているのは、'speaking' は他の話し相手がいなければ成立しないやりとり、すなわち、相手の発話を聞き、それに対してコメントをしたり、質問をしたり、相手の発話で述べられたことと関連する話をしたりが瞬時にできる能力である。これは、あらかじめ話す内容を用意したり暗記したりすることも可能なスピーチ、プレゼンテーションである 'spoken discourse' とは異なる能力が求められていることを示唆している。このことは、尾崎・椿・中井(2010) が日本語教育の会話教材作成に関して、「話すこと」を図 2 のように分類したことと共通している。

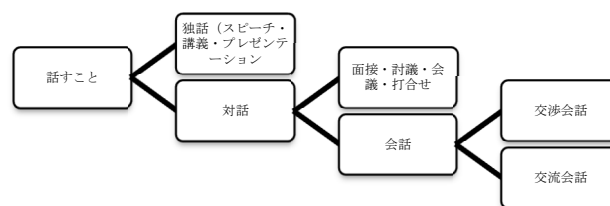


図2 話すことの下位分類 (尾崎・椿・中井 2010)

CEFR 2001 年版での 'spoken production' は、この図では「独話 (スピーチ・講義・プレゼンテーション)」のみである。「対話」の中にある「会話」は、あらかじめある程度の準備が可能な「面接・討議・会議・打合せ」とは区別される。会話はさらに目的をもつ「交渉会話」と「交流会話」に区別される。「交渉会話」は目的を達成するための会話で、たとえば、買い物の場面、飲食店での注文、道を尋ねる、お詫びをするなどが含まれる。CEFR の 2001 年版も、尾崎らの図も、speaking は単語と文法がわかっているだけでは成立しないことと、話す目的が異なるとそれに応じて必要なスキルが異なってくるということを表している。

スピーキング能力に関しては、初版の 2001 年版と 2018 年度版では大きな変更があった。2018 年に CEFR が改定され、いわゆる 4 技能と言われるものが大きく変化している。今までの 4 技能を、'Communicative language activities' に置き換え、'reception' 'production' 'interaction' 'mediation' の 4 つを掲げている。これは、実際に人間がどのように言語を使用しているのかという言語使用の視点からの分類と言える。特に、注目すべきことが二点ある。まず、一つは 'interaction' が独立して上位項目となったことである。この中には、'spoken interaction' だけではなく、'written interaction,' 'online interaction' という下位分類が設けてあり、必ず相手 (聞き手・読み手) の存在がある。もう一つは、2001 年版になかった 'mediation (仲介)' という項目が付け加えられたことである。これは、二つの異なる言語を行き来する (translanguaging) 能力のことで、言語的なものの仲介 (翻訳など) だけではなく、概念の仲介として、ほかのひとたちと共同で行うインタラクションのファシリテーターとなること、共同しながら意味を組み立てていくこと、インタラクションをマネージすること、話しが進むようにすることなど、インタラクションの場での能力を求めている。また、複合文化に関する側面、カジュアルな場面での振る舞い、気配りを要求される場面での振る舞いの能力も求められている。具体的な方策としては、「新しい概念を説明する方策」、すなわち、自分の持つ知識と結びつける方策、言語に適応する方策、複雑な情報をかみ砕いて再構築する方策があげられている。そして、この 'mediation' が、外国語学習の要であり、「言語コミュニケーション活動」の最終目標となっている。また、言語能力としては社会的適切さ、語用論的知識なども必要となってくる。

2.4 ELF 使用者とコミュニケーション能力

前節で示したコミュニケーション能力は、どの言語でも当てはまることであるが、外国語でコミュニケーションを行うような異文化接触場面の参加者は母語でのコミュニケーションとは異なる能力が必要とされる可能性がある。たとえば、母語話者の規範に従うことよりも、コミュニケーションの効率化を優先することが許容されていると言えよう(Seidhofer, p. 27)。また、話者はさまざまな L1(first language)のバックグラウンドがあるために、L1 を基本とした変種がある(Mauranen, p.34)。この変種の中には、話者の L1 に基づくアクセントや文法・語彙などの異なりがある。

さらに、この中には対人関係を軸としたポライトネスの問題も考えなければならない。特に、second order politeness の場合、L1 の社会・文化的背景の影響を強く受けているので、他の文化・社会出身者からはなぜそのような言語の振る舞いがあるのか理解できないことがあったり、ある文化・社会的背景では礼儀正しい振る舞いが無礼な行動や失礼な行動として受け取られたりすることもある。

本研究は、インド人ビジネス・パーソンと日本人ビジネス・パーソンの EFL 使用によるコミュニケーション能力をインタラクションを考えるため、以下の 2 点をリサーチ・クエスチョンとして提示する。

RQ1 インド人ビジネス・パーソンと日本人ビジネス・パーソンのコミュニケーションで問題になっている点は何か。

RQ2 mediation はどのように行われているか。

3. インドの言語環境

3.1 インドで使われる英語

インドの憲法で定められている連邦公用語はヒンズー語(हिंदी)と英語である。しかし、ヒンズー語の母語話者はインドの人口の 18%程度しかない(2018 年現在)。英語は準公用語という位置づけである。英語を公用語からはずそうという動きもあったが、連邦公用語のヒンズー語を使わない人たちからの反対があり、英語は連邦公用語として残されている。

日本人が最も接触する機会はビジネスの場面なので、そのような場面では英語が使用されていると言えよう。そのため、インド人はだれもが英語を話せると思っている日本人が多いようだが、実際にはそうではない。英語が話せるのは総人口の 10%ほどしかいないと言われている。たとえば、座談会で日本人からあげられた体験談として、首都デリーでは、スーパーマーケットやショッピングモールでの買い物、また、タクシーでも英語が通じないことが多くヒンズー語ができないと不便であるとのことである。Sindkhedkar によれば、公用語として定められているが使用しない人も多く、現実的には「英語」を学ぶ目的が貧しさからの脱却、よりよい就職先を得るための技能としてと

らえられている(Sindkhedkar, 2012)。

ヒンズー語と英語以外に、各州の公用語がある。インドには数千とも言われるさまざまな言語変種があるが、各州の公用語としての地位を獲得したのは 22 言語である。たとえば、本研究の座談会参加者には、ヒンズー語母語話者はおらず、カンナダ語(ಕನ್ನಡ)、テルグ語(తెలుగు)、タミル語(தமிழ்)、マラーティ語(मराठी)、マラーヤラム語(മലയാളം)の母語話者が参加している。括弧内の文字は各言語をその言語の文字で表記したものであるが、このように各言語では使用する文字も異なる。カンナダ語はカルターナカ州の公用語で話者は 3770 万人、テルグ語はアーンドラ・プラディッシュ州とテランガーナ州の公用語で話者は 8000 万人、タミル語はタミル・ナードゥ州の公用語で話者は 7400 万人、マラーティ語はマハーラーシュートラ州の公用語で話者は約 9000 万人、マラーヤラム語はケララ州の公用語で話者は約 3570 万人ある。これらは、お互いに意思疎通ができない言語である。したがって、母語の異なるインド人同士が話す場合は、ESL(English as a second language)を使用した spoken interaction を行っていることになり、すでに ELF 使用環境である。参加者の一人によれば、文法や単語やスラングが異なるが、特に問題がないと言う。日常環境で ELF 使用が多いので、ELF 使用に慣れ translanguaging の能力が高いと考えられる。

インドに英語が入ったきっかけは、1600 年の東インド会社の進出である。しかし、インド人に英語が浸透するようになったのは、1830 年代にイギリスが英軍やイギリス政府とインド人一般人の間に立つインド人エリートたちに向けて、イギリス式(全寮制)教育を取り入れてからである。そこでは、英語を媒介として授業が運営されていた。その後、そのようなイギリス式の学校で学んだインド人エリートが一般のインド人向けの学校をつくり、英語は富裕層や社会的地位の高い人たちに、さらに広まっていった。現在では授業料の高い私立学校では幼稚園、小学校でも英語の授業があるが、公立学校での英語の授業は中学からである。そのため十分に習得できない人もおり、英語を理解しない人も多いのは、このような理由による。

3.2 インドのコミュニケーション・スタイルの先行研究

南アジアの人のコミュニケーション・スタイルの特徴に関して、FitzGerald(2003 pp. 112-123)は、帰納的な話題展開をすることをあげている。長いターンを使って、根拠を述べてから話す傾向にある。これは、Clyne(1994)の分類では、スタイル B と呼ばれるもので、ターンが非常に長くなりがちで、改まって聞こえる官僚的な表現を使う特徴を持つ。FitzGerald のあげるもう一つの特徴は、並行構造(parallel structures)の使用で、同じ構文を使った繰り返しや等位接続詞を多用した表現などが見られる。FitzGerald のデータでは、形式的な表現方法で、帰納的な話題展開をとりながら自分の論点の正当性をさまざまにあげ、遠慮もためらいもなく意見を話す様子が複数の被検

者で観察されている。そして、その話し方は、オーストラリアの英語母語話者を含むその他の文化・社会的背景を持つ人たちをいら立たせてしまい、他の文化・社会的背景を持つ参加者との異文化コミュニケーションの失敗例としてとりあげられている。

4. 座談会の分析と考察

4.1 方法

座談会形式の聞き取り調査は2017年8月6日から11日に、インドのバンガロールで行った。調査を行ったバンガロールは、IT City と呼ばれ海外のIT企業の進出により2017年には世界のダイナミック・シティの1位となり、アメリカのシリコンバレーにある企業が多く集まっている。日本企業も急激に進出し、2017年には1300人の日本人が暮らしている。

座談会は、インド人のみが参加するものと、日本人だけが参加するものの2種類を実施した。インド人座談会は3組、日本人座談会は2組である。インド人の座談会は参加者は計10名で、カンナダ語母語話者5名、タミル語母語話者2名、テルグ語母語話者、マラーヤラム語母語話者、マラーティ語母語話者は各1名である。いずれも日系企業従事者か、それ以外の非インド資本の企業で仕事をしている人たちである。このような職種についている人はインドの中でも上位数パーセント以内のエリートである。職場での言語を複数あげている人は多いが、全員が職場では英語を使用しているが、家庭内言語は母語と答えている。また、バンガロール日本人会を通じて参加者を募集したため、インド人の中には、少し日本語ができる人もいる。日本人座談会の参加者は5名で、日本から派遣されている日系企業駐在員4名と、インド駐在体験後に独立しインドで会社を始めた人1名がいる。派遣されている4名はインド滞在3年から7年程度であり、そのうち3名は初めての海外赴任がインドである。インドで会社を始めた人は、通算40年ほどインドに滞在している。参加者の性別は、インド人10人のうち7名が男性、3名が女性、日本人は5人のうち男性が4名、女性1名である。

すべての座談会に、ファシリテーターとして、筆者と科研の研究分担者(いずれも日本人女性)の2名が参加した。インド人の座談会は英語で、日本人の座談会は日本語で行われ、すべてICレコーダーに音声を録音し、音声を研究資料として使っている。座談会の音声を研究資料として使用し、論文・学会発表などで発言内容が公開されることに関しては、全員から承諾書ももらっている。各座談会は30分程度から1時間である。

座談会の発言は以下のように分類した。

- (1) インド人ビジネス・パーソンと日本人ビジネス・パーソンのコミュニケーションで問題になっている点
 - (a) 言語にかかわる側面
 - (b) 価値観の側面
 - (c) ターン・テーキング・スタイルの側面

(d) 談話の組み立ての側面

(2) mediation の方法

(3) 言語にかかわる上記以外の側面

4.2 インド人座談会より

インド人座談会は英語で行われた。日本人ファシリテーターより、「日本人と仕事をしているの感想、ご苦労、工夫などを話してほしい」という要請に対して、各グループで座談会を開始するようにした。途中で、話題が途切れたり、内容で確認したい事項が出たりしたときだけ、日本人ファシリテーターが口をはさんだ。

日系企業で働くことについては、自分で日本企業にあとがれて就職したというのが参加したインド人の共通の考えであった。日系企業で働いているインド人は、全員が日本人が上司で、自分自身が部下の関係である。また、日本人上司の直属の部下である場合は、日本人とインド人のほかの従業員との間に立つ役割も担う。

座談会で出た会話のスタイルの側面、仲介の面、そのほかの言語面で、類似の回答をまとめ4.1で示したもので分類したのが表1である。いかに詳細を示す。

(1) コミュニケーションで問題になっている点

(a) 言語にかかわる側面

言語面に関しては、ひとつは日本人の指示が短いということ、もうひとつは日本人の英語が聞き取りにくいという意見である。日本人の指示がわかりにくいという点は、(d)の談話の組み立てとも関係するところである。座談会出席者からは、直接的な情報が欠けることがあると指摘があった。具体的な例はあげられなかったが、高コンテクスト文化である日本人が行う傾向にある省略された表現が、日本人以外には伝わりにくいことに由来すると考えられる。

もうひとつの英語が聞き取りにくいというのは、言語の面に関係があることである。日本人の英語は聞き取りにくいという声がある。仕事には問題がないという人もいるが、日本人が慎重にゆっくりと話すことを否定的にとらえている発言もあった。

(b) コミュニケーションの価値観の側面

この側面は、6項目があげられていた。まず、日本人が出す指示の根拠やマネジメントの方法が理解できないに関しては、これだけでは具体的な事例が不明であるが、仕事の作業に関する考え方、価値観がインド人と日本人とで異なっていることが推察される。日本人の上司は礼儀正しい。日本人は他アジア企業に比べ、公正でありまじめであるととらえられている。

一方、日本人がインド人の話を聞かない、インド人の質問に答えないという点が指摘されている。日系企業の場合、日本人が上司となるので、部下のインド人を下に見ている可能性が高い。役職の上下関係で態度を変えるのは、階級主義の価値観であるため、日本人は階級主義であることが示唆される。ここでは深く議論しないが、インドを新興国

とみなして、そのような態度をとる日本人がいる可能性もある。

インドも身分制度がはっきりしており、階級主義の価値観はあるが、日系企業に事務職や研究職として採用される人たちは、教育レベルの高い富裕層・エリートであるため、日本人のとらえる相対的な階級差とは感覚的なずれがあるとも言える。若いインド人研究者が、日本人の上司は 24 年のキャリアがあり自分の 7 年のキャリアよりかなり長いと述べていたが、役職や身分的なものよりは、経験やスキルで上下関係をとらえている様子もみてとれる。

なお、インド人女性のビジネス・パーソンからは、日本人やアメリカ人に対してのほうが質問がしやりやすく、躊躇なく「ごめんなさい。もう一度言ってください」と言えるが、インド人男性に対してのほうが質問しにくいという指摘があった。

日本人が質問に答えず自分で調べるように指示したり、質問の回答が的を射ていないことが多いという指摘があった。このことに関しては、次の 3 点の可能性はある。ひとつには、日本人は質問することを失礼ととらえることがあること（重光、2015）、もうひとつは日本人の英語力に由来し、回答することが面倒と考えること、さらに、もうひとつの原因は、日本語母語話者の「察し」に頼るコミュニケーション法である。質問に答えてくれるがその回答が短いなどや、直接的でなくあいまいであることにより、理解にかなり時間を費やしてしまうという経験も語られた。

日本人は判断の許容範囲が狭いというインド人からの意見から考えられるコミュニケーションに影響する価値観は、「不確実性回避重視」の価値観だろう。日本人が示す理由はなんであれ規則に従う態度、指示の根拠はわからないが日本の本社からの指示に忠実に従う様子などは、インド人には有標の言語行動だととらえられている。

そのほかに、日本人はほかの人の気持ちを考えすぎである、ほかの人がどう思うかを優先して考えているという指摘もあった。

(c) ターン・テーク・スタイルの側面

インド人が気になる日本人の会話のスタイルは、主に話すスピードである。日本人がゆっくり話す様子は、慎重な態度に見えるが、明らかにインド人とは異なっていることがわかり、話すスピードの不一致がお互いがぎこちなさを感じる原因となっていると言える。

(d) 談話の組み立ての側面

談話の組み立ての面であげられていたことは、日本人上司が部下に指示をするときの談話の順番がインドで一般的に行われているものと異なる点である。インド人上司は問題の原因を説明し、そのためにどうやるかを伝達し、その理由に基づいて指示を出す。日本人は決定事項である指示しか言わず、その裏の情報（原因や解決方法）が欠けていると受け取られている。また、直接の指示がない高コン

テキスト文化特有の話し方をして、指示内容も察ししなければならない状況に置かれる。このような日本人の談話の組み立てから伝わる情報は、インド人には非常な不安を与え、また、自分が理解しながら仕事を遂行しているかどうかについても不安になると言う。

表 1 インド人座談会で語られたもの

分類	発言	
(1)	(a)	日本人上司の指示表現が短いため、なぜそれをやるのかわかりにくい。 日本人の英語がわかりにくい。
	(b)	日本人が出す指示の根拠が理解できない。日本人のマネジメント方法が理解できない。
		日本人はインド人の発言を聞かない。
		日本人は他の人の気持ちを思いすぎる。
		日本人は判断の許容範囲が狭い。
	(c)	日本人は、質問に答えてくれないときがある。自分で調べるように言われることがある。
		日本人は質問に答えてくれるが、その答えに納得いくまで 1 週間ぐらいかかることがある。
		引き受けた仕事に対して遅れてしまったときの対処法が難しい。
	(d)	日本人は慎重にゆっくり話す。
		日本人が一つの話題に固執しすぎる。 インド人と日本人が指示をするときの言う順番が異なる。
(2)	日本人の考えが理解できないときは自分が納得するまで質問をする 日本には日本のやり方があり、日本人に質問をすることはよくない。	
	意味がわからないところはジェスチャーで補完する	
	日本語が少しできるので、日本人上司とは日本語を使うが、一番大切なところを伝えるときは、英語を用いる。	
(3)	話題にあがらなかった。	

(2) mediation の方法

インド人は、(1)で示した価値観に由来するコミュニケーションのブレイクダウンについては、ひとつは納得するまで質問をするということをあげた人がいた。一方、日系企業 30 年近く勤めているインド人は、日本人に質問をすることはよくないと言っている。これは、重光 (2015) が指摘したように、日本語母語話者は会話の中で質問されることは、居心地の悪い会話であると考えている。長年、日本人と働いているインド人は、経験から日本人の会話で好まれる振る舞いを無意識のうちに知っているのだろう。

日本人の英語力の問題としての mediation は、ジェスチ

ヤーによる意味伝達の補完と、伝達内容に応じた日本語と英語のスイッチである。とくに、日本語のできるインド人は、英語の苦手な日本人上司が楽に感じるように、日本語を使うようにしているが、重要なところは英語で述べていると言っていた。おそらく、外国語である日本語よりも、第二言語である英語のほうが話しやすいこと、また、命題を軸とした統語的特徴をもった英語のほうが、多義的な表現やあいまいな表現を避けやすいので、そのように切り替えているとも考えられる。

(3) そのほかの言語に関する側面

言語能力に関して、日本人とのコミュニケーションに困らないと考えている人たちは、日本の本社が英語ができる日本人を派遣していることが多いからだと言っている。しかし、技術系の人には英語ができない人もいてコミュニケーションに苦勞をするという発言もあった。

以上、インド人の参加者の座談会をまとめると、コミュニケーションで問題となるのは、会話のスタイルの中の価値観であると考えられる。この違いの克服については、特に指摘はなかったが、日本人が許容範囲が狭く、不確実性回避の傾向がある一方で、インド人のほうはそれほどでもなく、日本人の価値観の異なりは許容できることなのではないかと考えられる。日本人座談会参加者から、インドで法律で英語が公用語とされているが、実際の使用を見ると日本での公用語とは言えないという指摘があり、インド人同士でも相当なストレスがあるようだとはいわれていた。しかし、もともと、母語が異なる人たちとの会話に慣れているため、無意識のうちに異文化コミュニケーションで起こる違和感は、日本人に比べ無標なものとなっているとも考えられる。

座談会では、ファシリテーターが母語の異なるインド人同士の英語による会話に問題がないかを尋ねると、語彙、文法、スラングは人によって異なるが、困った経験はないという。わからなければ繰り返して聞けばよいのであまり問題意識としてはあがっていないようである。

4.3 日本人の座談会より

日本人の座談会の発言を、4.1 で示した項目に従って分類する (表 2)。

(1) コミュニケーションで問題になっている点

(a) 言語面

言語面に関しては、インドの英語が日本の中高で学んだものとかかなり異なる点である。聞き取りにくい、インドで話される英語は独特な発音であるなどと言われているが、対人関係で用いる婉曲表現もほとんど日本の中高で指導されないため、とまどいを見せる日本人が多いようである。

No problem と言って裏切られたという点であるが、日本人は「心配ないですよ」という意味にとる傾向にあるが、インド人の座談会参加者にファシリテーターが確認した

ところ、インド人は No problem には、「問題ない」という場合にも使うが、「この話題は終わりにしたい」「それ以上、この話題は言わないでほしい」という場合にも使うことがあるという。また、考え方の許容範囲が広く、不確実性回避の価値観が少ないので、言語の説明で十分と考えている。日本人にこの使い方が伝わっていないのではないかと推察される。

表 2 日本人座談会の発言

分類	発言	
(1)	(a)	日本で学んだ英米の英語が通用しないような気がする。 No problem とか yes sir と言っていて裏切られることがある。 婉曲な表現が多い。
	(b)	インド人は指示されたことに対して「できない」と言うことは失礼にあたると考えているようだ。
	(c)	3人ぐらいが同時に話していて、さらになかなか話し終えないので、口がはさめないときがある。
		会話の中では、声の大きな人、職位の高い人の意見が受け入れられやすい。
(d)	議論では派生した枝葉のほうで議論が活発化する。	
(2)	仕事を与えた場合、毎日、始業時と終業時など頻繁に、どこまで終わったかなどを確認する。	
(3)	英語ができる人より、英語コミュニケーションができるの方が適性がある。	
	質問を受けたら直接的な答えを言う、または、補足説明ができるようになる。	

(b) 価値観の側面

指示されたことに対する責任感が日本語母語話者とインド人では異なることが指摘されている。とくに、全員からとりあげられたのは、「できない」ということは失礼にあたると考えているようだ。しかし、日本は引き受けたら絶対やる強迫観念のようなものがあるが、インド人は引き受けてもできなければ仕方がないという態度であると感じられるようである。「やってみただけれど、できなかった」という場合でも、謝罪はなく、理由を述べる場合が多い。その理由も、特定の人を非難するのではなく、ほかの理由を探している。その理由が、日本人には受け入れられない場合がある。また、参加者の一人は、対立が起きそうになった場合に、まるくおさめる方法が異なるのではないかと述べている。

(c) ターン・テーキング・スタイルの側面

インドの人との会話の苦勞として語られた内容には、10

人ぐらいで会話をしていると、3人ぐらいが同時に話し、さらになかなか話し終えないので、口がはさめないときがあるというのがあった。具体的なほかの例として、職場の採用面接でも、面接に来たインド人志望者がひたすら話すため、採用側である日本人が質問できないという事態がよくあるとのことである。

さらに、会話の中では、声が大きな人、職位の高い人たちの意見が受け入れられやすい。とにかく、会話では話始めた人（インド人）が「勝ち」で、今、話し始めたので聞けという態度が示されがちだと言う。しかし、質問したいことがあるので途中で止めて、話している内容を確認すると、違うと言われることがありインド人の会話の内容に信ぴょう性があるか不安であるという発言があった。これは先行研究の FitzGerald(2003)の南アジアの特徴としてあげられたことと関連があり、南アジアの参加者（おそらくインド人）が、帰納的な言い方で長くしゃべる中で、メリットやデメリットの両方を織り交ぜて結論を出すため、聞き手はどこにポイントを置いているのか戸惑ってしまう現象と類似する。

(d) 談話の組み立ての側面

議論では派生した枝葉のほうで活発化することがあるので、どこかで止めに入らなければならないと感じるということである。

(2) mediation の方法

特定の例としてあげられていた場面だが、インド人の部下が、仕事を引き受けると言って、完成させられない場合がよくある。そのような場合は、何が残っているか、何時間あればできるのか、ほかに何を知らなければならないかを考えてもらい、行わせる方向で進むようにしている。仕事を与えた場合、毎日、始業時と終業時など頻繁に、どこまで終わったかなどを確認すると、作業の優先順位がある様子があるという経験を語った参加者がいる。

(3) 言語にかかわるそのほかの側面

日本人が海外で働くためのコミュニケーション能力に必要なものについて、議論が深まったグループがあった。そこでの結論は、英語コミュニケーション能力とは、英語だけが優れている必要はなく、物おじしないで楽しめる人、考え方の違いが受け入れられる人、上から目線をしない人の3点であった。コミュニケーション上の問題は語学の知識ではなく、異なる背景を持つ文化・社会への対応ができる柔軟さというのは海外駐在の体験に基づく考えだとも言えよう。コミュニケーションができれば情報量も増え、ほかのインド人からも仲間意識を持たれるだという経験から生まれた知見も語られた。

その中でも、上から目線の態度には、日本人は自国には優れた製品がたくさんある、人々のしつけが行き届いている。モノ作りも日本の方が優れているため、教えてあげようという考えから生じる態度を押しつける例は少な

いが、それに対しては特に経験が長い日本人からは否定的な意見が示された。的確なアドバイスは喜ばれるのでよいが、日本的価値観でインド人（日系企業ではインド人が部下）を支配してはならない。このように言われたらどのような気持ちになるかを考えることが重要であることが指摘された。

5. おわりに

本研究では、インド人と日本人の異文化間コミュニケーションを ELF 環境の場と考え、異文化コミュニケーションやコミュニケーション能力についての先行研究を示し、座談会の結果を示した。

座談会より、言語面に関しては、インド人も日本人もお互いの英語がわかりにくいことが述べられていた。また、価値観の面からは、日本人・インド人とも階級主義の文化であるが、何を階級としてとらえるかが異なることにより、コミュニケーションに影響を与えていたと言えよう。また、何が礼儀なのかという文化特有の価値観も含まれていることがわかった。たとえば、インド人は頼まれたことは断らず引き受けることが礼儀で、責任をもって達成するかは別の問題としてとらえていた。一方、日本人は会話の中で質問することを失礼と考えることもあるため、インド人からの質問への対応がインド人の期待通りではなく、日本人が自分で調べるようにと言ったり、答えがあいまいであると受け止められていることがわかった。

ターン・テーキング・スタイルの側面に関しては、日本人がインド人と会話をするときインド人が早口なため、口を挟む間がないことがよくあるという指摘がなされていた。このことに関しては、インド人からは日本人が話すスピードが遅いと指摘されていた。

このような価値観やターン・テーキング・スタイルに両母語話者間で大きな隔たりがある ELF 使用者同士の会話であるといえよう。現在の対応法としては、日本語の話せるインド人の採用がなされていた。

価値観で日本人側から問題とされた、頼まれたことでも引き受けるのがインド人の礼儀のようなので、仕事の進行に不安がある点については、進捗状況をインド人に頻繁に報告させるなどして、引き受けた仕事を達成させることで解決を図ろうとしていた。また、日本人の察しを求めるような短い発言については、インド人からは日本人の発言の真意を知るために納得できるまで日本人に質問をし、意図を理解しようとする工夫をすることがわかった。

談話の組み立てとしては、「指示の根拠が理解できない」「マネージメント方法が理解できない」などは、根拠を丁寧に示せばインドの人に伝わるのではないかと考えられる。

ELF の英語使用については注目が高まっているが、語学教育の観点からは、日本の英語教育と ELF はどのような関係を持つべきかが、新たな課題ともいえる。今までは

inner Circle の英語母語話者が規範であったが (Murata 2015)。座談会の回答から考えると、学校での英語指導でも行えることは、発音や話すスピードの訓練であろう。また、論理的な談話構成、話題の展開方法、質問に対しては3項目程度答えを続けるなどは授業でも取り入れることができるだろう。これは、英語の授業だけにゆだねるのではなく、ほかの教科でも日本語で実施する場合でも指導はできると思われる。

もう一つ、座談会で浮き彫りになったことは、異文化コミュニケーション・トレーニングにかかわることである。これは価値観の違いを受け入れたり楽しんだりすることができるようになるトレーニングである。日本では会社の駐在者用のトレーニングなど限定された場面でしか行われていないようであるが、日本の小・中・高を含む教育現場でコミュニケーション・スキルと外国語と異文化コミュニケーション・トレーニングがどのように取り入れることができるか、何をどの段階で行うのか、英語という語学の授業の中でできるのか、授業の枠を超えてしなければならないのかの検討も必要であろう。

今後は、この座談会でのインド人ビジネス・パーソンと日本人ビジネス・パーソンから指摘された項目をもとに、実際に日本人とインド人の ELF による異文化コミュニケーションの談話分析へと研究を拡張する。Inner Circle の人との英語による異文化談話分析は、Inner Circle の人のコミュニケーション・スタイルが規範であるという見方がなされてきた。しかし、どちらも母語話者ではない ELF の場合は、それぞれの文化・社会背景をもつターン・テーキング・スタイルの比較や、談話の組み立ての比較だけではなく、異文化会話の発話にある価値観の違いも分析する必要がある。その中で、英語のコミュニケーション法の普遍的な部分と、ELF 使用者の母語の影響による個別的側面も考慮しなければならないと考える。

謝辞 本研究の座談会に参加してくださった方、また、座談会のアレンジをしてくださったバンガロール日本人会のご協力に感謝申し上げます。

付記 本研究は、科研費基盤研究(C)課題番号 17K02903 「南アジア・東南アジアにおける ELF 談話スタイルの実態調査：英語発信力に向けて」 (研究代表者 重光由加) の研究成果の一部である。また、大学英語教育学会待遇表現研究会 (代表 村田泰美) との共同研究である。

参考文献

- British Council (2014). Indian School Education System: an overview. London: British Council.
- Celce-Murcia, M. (2007) Rethinking the role of communicative competence in language teaching in E. Alcon Soler and M.P. Safont Jorda (eds.), *Intercultural Language Use and Language Learning*, 41-57.
- Clyne, M. (1994) *Intercultural communication at work: Cultural value in discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ehrenreich, S. (2016). English as a lingua franca (ELF) in international business contexts: key issues and future perspective. In Murata, K (Ed.). *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: Conceptualization, research and pedagogic implication*. London: Routledge.
- 榎木園鉄也 (2016) 『インド英語のツボ—必ず聞き取れる5つのコツ— (電子書籍版)』株式会社アルク。
- FitzGerald, H. (2003). How different are we? Spoken discourse in intercultural community. *Multilingual matters*. [村田泰美 (監訳) 重光由加・大谷麻美・大塚容子 (訳) (2010) 『文化と会話スタイル—多文化社会・オーストラリアに見る異文化間コミュニケーション』ひつじ書房]
- JLL cities (2017) 'JLL city momentum 2017' <http://www.jll.com/cities-research/city-momentum> (retrieved July 23, 2017).
- JLL cities (2018) 'JLL city momentum 2018' <http://www.jll.com/cities-research/city-momentum> (retrieved Aug 9, 2018).
- House, J. (2016). Own-language use in academic discourse in English as a lingua franca.
- 共同通信社 (2015) 『世界年鑑 2015』株式会社共同通信社。
- 奈良毅 (2007) 「インドにおける「危機言語」に関する研究。南アジア研究第 19 号 pp. 106-113.
- 眞砂薫 (2013) 「国際英語としての英語(English as a Lingua Franca): 定義の再考」近畿大学教養・外国語センター紀要 外国語編 4 (1) pp. 117-126.
- Mauranen, A. (2015) English as a global lingua franca: changing language in changing global academia. In Murata, K. (Ed). *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: Conceptualization, research and pedagogic implication*. London: Routledge.
- Murata, K. (2016) *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: Conceptualization, research and pedagogic implication*. London: Routledge.
- 大谷麻美 (2015) 「日本人にとっての英語コミュニケーションの壁: 本研究の目的と位置づけ」津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子著『日・英語談話スタイルの対象研究: 英語コミュニケーション教育への応用』pp. 1-14. ひつじ書房。
- Ramesh, T. (2016). *Teamwork & Indian Culture: A Practical Guide for working with Indians*. Kindle Edition.
- Sindkhedkar, S. D. (2012). Objectives of teaching and learning English in India. In *Journal of Arts, Science and Commerce*. Vol. III. pp. 191-194.
- パンドラギ・シャンカル、加茂純 (2014) 『インド人コンサル

タントが教えるインドビジネスのルール』中京出版。

Seidlhofer, B. (2011) *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford: Oxford University Press.

Seidlhofer, B. (2016). ELF: English in a global context. In Murata, K (Ed.). *Exploring ELF in Japanese Academic and Business Contexts: Conceptualization, research and pedagogic implication*. London: Routledge.

Storti, C. (2015) *Speaking of India: bridging the communication gap when working Indians*. London: Nicholas Brealy Publishing.

東京書籍編集部 (2006) 『世界各国要覧』東京書籍。

山下博司 (2016) 『インド人の「力」』講談社。